

奈弓連だより

◆ 第26回 奈良女子弓道大会

開催日時： 11月23日(祝) 奈良市弓道場
参加者： 大学生・一般 114名
 高校7校 21名
 中学1校 3名 計138名
競技： 団体戦 1団体24射 的中制
 個人戦 各自4射ずつ2回(8射)
 5中以上予選通過
(ただし、団体の成績をもって、これに換える)

団体戦では、45チーム中12中以上が10チームという結果でした。的中の面では少しふるいませんでしたが、日頃から修練されている様子が伝わってくる試合でした。

個人戦では、二段以下の部で21名が予選通過。緊張の中競技が行われ、5本詰めての優勝でした。三段以上の部では、4名が予選通過でした。

中学生から一般まで集まるこの大会で、それぞれ勉強になる事、また親睦も深まったのではないかと思います。こうして活気ある大会を開催できることうれしく思っています。ご協力ありがとうございました。

最後になりましたが、寒い中大会運営にあたり、お世話いただいた役員の皆様に厚く御礼申し上げます。
(女子部 柏木 かおり)

【団体戦】

- 優勝 奈良教育大学B
(田中美奈・沖田真理・林 未織) 19中
- 2位 橿原高校
(石川美佐希・福西真歩・鶴留彩花) 16中
- 3位 高田商業高校
(吉田和代・江場志織・弥富衿奈) 14中

【個人戦】

二段以下の部

- ① 石川 美佐希 (橿原高) ② 井岡 千幸 (畝傍高)
- ③ 船場 里沙子 (奈良女子大)

三段以上の部

- ① 林 秀子 (橿原) ② 服部 有希子 (奈良医大)
- ③ 河野 久栄 (奈良)

■ 第218回 審査の結果

11月24日(月)奈良市弓道場にて実施。79名の申請者が平素の修練成果を披露しました。

結果は、1級16名、2級6名、3級1名、初段23名、式段2名、参段5名、四段は該当者無しの結果となりました。受審者の中では、矢つがえ動作、退場の方向、失の処理が不十分な高校生、大学生が見られます。各道場でのご指導をお願いします。(審査部)



合格おめでとうございます!!

臨時中央審査結果

(12月5日、6日 京都)

錬士 松村 由喜子さん

六段 早山 和子さん

=====

◆ 第21回 奈良県大学選手権大会

(11月24日開催)

▽ 男子

【団体】

- 優勝 奈良県立医科大学C
(芳田 龍太・平田 一記・賀屋 大介)
- 準優勝 天理大学A
(長田 雅輝・廣澤 誠哉・吉田 誠宏)
- 3位 帝塚山大学C
(角野 耕治・加藤 健・天田 貞之)

【個人】

- 優勝 長田 雅輝 (天理大学)
- 準優勝 吉田 誠宏 (天理大学)
- 3位 新子 修平 (天理大学)

▽ 女子

【団体】

- 優勝 奈良大学A
(市村 綾・清水 優美・萩村 美海)
- 準優勝 奈良教育大学A
(野村 知世・若林 香織・上原 怜子)
- 3位 奈良大学D
(鈴木 裕美子・相川 悠・田中 麻央)

【個人】

- 優勝 萩村 美海 (奈良大学)
- 準優勝 喜寿 由佳吏 (帝塚山大学)
- 3位 市村 綾奈 (奈良大学)

■ ねりんピック2008鹿児島

10月24日に奈良県選手団は、伊丹空港より空路鹿児島入りをしました。翌25日総合開会式で、常陸宮ご夫妻のご臨席のもと、“かごしまで 元気 ふれ合い ゆめ噴火”のスローガンで、見事なアトラクションなどがあり、又目の前の桜島の噴煙が10分程度ですが、選手団を歓迎するかのよう噴きあがり、とても感動しました。



予選通過は出来ませんでしたが、奈良チームは奮闘し、次に繋げるような結果が出せて、約半年の練習の成果が現れました。決勝トーナメントを観戦し、ご高齢の方たちの「会」の充実、見事な「離れ」などを拝見して色々勉強させて頂きました。郡山支部より2名初参加でしたが、チーム編成時に立てたキーワード「至誠と礼節」に徹して、仲良く完全燃焼しようの通り、チームワークも良く楽しい大会でした。帰りは一日余裕を取り、市内観光などさせて頂き、記憶に残る鹿児島でした。

この様な機会をくださいました(財)健やか奈良支援財団、奈良県弓道連盟会長様始め連盟の皆様がたのご尽力に厚く感謝いたします。(監督 中埜 広樹)

2008年 年間表彰

❖ 第5回全国中学校弓道大会での好成績

- ☆男子：橿原市立白橿中学校
階戸 尊・山本 雅也・兼近 深宇
☆女子：橿原市立橿原中学校
皿井 美沙・杉本 真莉・仁田 奈名美

❖ 全国高校弓道大会での好成績

- 男子個人 藤田 祐樹 (畝傍高校)

歳時記

年賀の常識

長命を祝することで算賀、年算の賀などともよんだ。今日寿命が延びているので四十を「初老」などといっても通じないが、四十から老人の数に入れた。四十の賀である。その後五十の賀、六十の賀、と十年ごとに続くのであるが、鎌倉時代に六十一歳を還暦として、生まれたときの干支(かんし)(十干十二支)が再びめぐってくるこの年を祝うようになった。また本卦返りともいっている。七十は古稀の賀「人生七十古来稀なり」の古語よりきたもので、今日では平均寿命以下である。室町時代には七十七、八十八を祝う風がおこり、<中略>つぎが九十の賀、百の賀でまた白寿といって百から一をとった九十九の祝いがある。年賀の歴史を見ると、聖武天皇の四十歳の賀が、天平十二年(740年)に僧良弁によっておこなわれている。この頃が始めであろう。その後皇室や幕府でしばしば盛んに行われている。

今日賀の祝いをどのように考えるべきであろう。<中略>六十、六十五定年といっても、働く力は十分に持っている。このような賀寿は本人の心持が、功なり名とげ引退して、悠々自適の生活に入ったときにして始めて祝うのが、この賀の意味を生かし祝うこととなると考えられる。

また一年を上元、中元、下元とし、指導を受けた先生や世話になった方々にお礼を申す日と定めたのも、この折り目の大切さを教えている。ことに、節句の中で全国的に重視されているのは正月である。

お節料理が正月料理の代名詞のようになったのも、この日のお節の料理が普及しているからである。一年の最初にあたり、心を新たにして新しい年を迎え、一年の計をたてることは大切である。お節の料理は元来神祭を催し、神酒供物を捧げた後、それを一同でいただく、神と人とが共食する料理である。このお節料理に日常の「饗(け)」の料理に対して晴れの料理といい、日常の粗食をおぎなう日としているが、しかもそれは保存食(餅、勝栗、ごまめ)などすべてであり、また栄養食として選ばれている。日本人の考え方の特徴は宗教観にしても哲学的にむずかしいことより先に、日常生活の自然の中に神とともにあるという考え方である。これも意識的よりも無意識的に潜在的にとらえられている。そしてこのことを哲学的に究明し、文化科学自然科学の目で学問的に裏付けたとき、それが正しいことであるということを日常的に実践しているのである。また神を祭るにしても、神に人間と同じ住居を共し、日常的料理を饗し、布を奉り衣食住同じようにして祭るのである。

<以下次ページに続く>

■ 納会報告 平成20年12月14日(日)

於：橿原公苑弓道場 参加者：50名

雨上がりの曇天のもと、大掃除および納会が行われました。開会式ではこの一年間の昇段昇格者（五段：八名、錬士：一名、六段：五名）および年間表彰者（全国中学生弓道大会男子団体優勝、同女子団体二位、同個人入賞およびインターハイ個人入賞）が紹介されました。

矢渡しは射手・竹村副会長、介添え・岡本（蔦）、真鍋両錬士により執り行われ、さっぱりとした道場的中の快音が響きました。

最初に昇段昇格の五段二名、錬士一名および六段四名が緊張の面持ちで一手行射を披露。続く年間表彰者への記念品贈呈では、竹村副会長が白橿中学の山本選手と笑顔で握手を交わされました。

昼食後の射会は和服での参加も多く、一年の締めくくりにふさわしい引き締まった雰囲気を感じられました。最後は結果発表と恒例のプレゼント交換で盛り上がりながら、来年の一層の精進を期して納会を終えました。

納射会での的中上位5名は、9中の蔵地 隆文、矢野 有吾、山口 亮二、8中の瀧井 浩一郎、乾 光孝でした。
(競技部 井上ゆみ子)

■ わかくさ会第50回記念勉強会

わかくさ会では、平成14年11月から射技、体配の向上を目ざして勉強会を開催しております。以来約6年間、隔月で西中副会長と阪中事務局長に講師としてお越しいたごき、月に1度、射技・体配・射礼等テーマを決めて研修

しています。

先ごろ節目となる50回目を開催するにあたり吉本清信県連会長、西中正副会長兼理事長、阪中計夫事務局長のお三方を講師としてお迎えし、第50回記念の勉強会を開催しました。

閉会時に吉本会長からご指摘のあった「執弓の姿勢をもう少し勉強してほしい」のお言葉を胸に今後の練習に励んでいきたいと思います。吉本会長、西中副会長、阪中事務局長、講師としてお越しいただき誠にありがとうございました。誌上からとはなりますが、改めてお礼申しあげます。

(わかくさ会代表幹事 清水 勝)

注：この報告は手違いがあり掲載が大変遅れましたことお詫びいたします。内容も一部変更させていただきました。(編集子)

お節料理<前ページより続き>

正月のお節料理を取りあげれば、まず餅である。そして黒豆、栗きんとん、昆布巻き、田作り（ごまめ）、数の子、玉子焼き、かまぼこ、なます、などすべて保存食である。栄養については栄養価の観点からは問題もあろうが、餅の消化をたすけるために大根やかぶ、にんじんなどのなますがあり、黒豆は不老長寿の効があるとされ、また声がかれたときに効くともいわれ、なお黒豆を煎じて飲むと毒消しの作用があるといわれ、昆布は便秘を直し、回虫を駆除するなど、多くの言い伝えがある。いずれにしても、この節の料理としての保存食は主婦を料理から正月の三が日は解放して骨休みをさせ、また栄養をとり長寿を祈る意味がふくまれていた。

屠蘇（とそ）は中国からの伝来であるが、漢方薬としての植物を調合して酒などにまぜ、正月の節の、第一のご祝儀ものとしている。内容はいろいろの調合があるが、白述（びやくじゆつ）、大黄（だいおう）、ききょう、さんしょう、桂心（肉桂）、また毒薬である鳥頭（とりかぶと）なども調合したといわれる。

今日お節の料理は、食料店で買い整えるようになったが、大晦日の日、これをみずから作ることが神饌への心であった。

お供え

古くから餅は神饌として用いた。また「歯固め」といって長寿を祈るため、宮中などでは正月に餅や猪鹿を食する行事があった。お供えも神饌としての意義から移ったものであるが、同時に家族の一人一人を祝うために、御総様え（おそうさまえ）などと称してひとまとめにして重ね餅を祝った。

武家の大切な具の中心である鎧や、女子の大切な鏡に、正月の心を新たにすること大切な日として餅を供え祈ったのが鏡餅であり、具足餅である。江戸期には仏壇、神棚、かまど、荒神棚などにも供える風習が町方にあった。

具足餅は、円い紅白の輪取り（輪のわくに当てた中央の盛りあがりのない円形）に亀甲型の六角の、紅白の「のし餅」を五枚（または七枚）を紅白互いに重ね、その上に米盛りをし、橙に根小松を植え（水あげをする）、えびを抱かせて、昆布・はんだわらを置いた上に据え、その周囲に正月の祝いの料理を並べる。二十九日に餅をつくのは苦持ちちといって嫌う。二十八日までについたのは、松飾りと同様である。地方によっては十二月十三日は正月の事始めとして、正月の用意にかかる日である。

「小笠原流マナー」 著者小笠原清信 グラフ社発行より
中笠原大学藤原孝澄(中笠原樹)

